

各関係機関長 様

高知県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について

病害虫発生予察特殊報第1号を送付します。

平成21年度病害虫発生予察特殊報第1号

1. 病名 トマト萎凋病 レース3

2. 病原菌名 *Fusarium oxysporum* f. sp. *lycopersici* race3

3. 発生物 トマト

4. 発生経過

本県の施設トマトでは、これまでにトマト萎凋病レース1及びレース2の発生が確認されていたが、抵抗性及び耐病性品種の導入により問題となる被害の発生はなかった。しかし平成20年秋頃から、県中央部の施設トマトで、萎凋病特有の症状を示す株が増加し始めたことから、東京農工大学農学部にて診断を依頼したところ、本県ではこれまで発生が確認されていないトマト萎凋病レース3と診断された。

現在のところ、県内では県中央部の約1haで発生が確認されているだけであるが、県外では平成9年に福岡県で発生して以降、平成14年に長崎県、平成16年に徳島県、平成20年に愛知県、青森県で発生が確認されるなど、全国的に広がりを見せている。

5. 病 徴

トマト萎凋病レース1、2と同じく、トマトのみに感染する。病原菌が根から侵入して導管部を侵し、下位葉から黄化、萎凋し始め、やがて株全体が萎凋し、最終的には枯死する。根腐萎凋病と異なり地温の低い時期の発生は少なく、地温が高くなるにともない被害も激しくなり、また根腐萎凋病に比べて地際部からかなり高い部位まで導管部の褐変が認められる。レースによる症状の違いはなく病徴からの区別はできないが、レース3に抵抗性を持たない品種で萎凋病の発生が拡大した場合にはレース3の感染が疑われる。

6. 病原菌の形態・性質

糸状菌の1種で不完全菌類に分類され、分生子と厚膜胞子を生じる。分生子は新月形で複数の隔膜を持つ大型分生子と隔膜を持たない楕円形または卵形の小型分生子の2種類があり、いずれも無色である。厚膜胞子は円形または楕円形で、土壤中で長期間生存できる。

本菌の生育適温は26～28℃である。

7. 伝 染

罹病した植物の残さ上で生存し、分生子や厚膜胞子による土壌伝染が主であるが、種子伝染も行う。特に土壌水分の急激な変化や過剰施肥などにより根が傷むと感染しやすくなる。

8. 防除対策

- (1) 種子消毒された無病種子を用いる。
- (2) 育苗には無病の用土を用いる。また、前作に発病が認められたほ場では土壌消毒を行う。
- (3) レース3に対して抵抗性を有する台木品種(プロテクト3、ブロック、がんばる根トリパー等)を利用する。
- (4) 発病株には分生子が形成され、土壌中にも厚膜胞子が残存して感染源となることから、発病株はできるだけ早期に地下部を含めて除去し、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- (5) 過剰な施肥や土壌水分の急激な変化、土壌PHの極端な低下は発病を助長するので、適正な肥培管理を行う。